









にゅわん♡

にゅわん♡

にゅわん♡

にゅわん♡



はぁ♡

はぁ♡

ニャ♡

ニャ♡



はぁ♡

はぁ♡

ピタッ

。。。。







フムフム

フムフム

お♡

お♡

カリカリ♡
カリカリ♡

フムフム♡

ハ♡
チュ♡

ハ♡
チュ♡

ハ♡
チュ♡

ハ♡
チュ♡









♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡



「ははっ！
口じゃ威勢が良いが、体は正直だな！
ほら、勝手に股を開いて俺の上に跨がってるぞ」

「な、なにこれ?!
なんで勝手に身体が動いて...っ!」

「ははははは！
借金を背負ったメイドの分際で俺の言うことを聞かなかったからな！
お前の身体を乗っ取らせてもらったんだよ！」

「ふざけんな！変態！
借金とは絶対払うって言ったでしょ！
後で覚えてろよ！」



「や、やめて…っ！
身体が勝手に…っ
嫌、入ってくんな…っ♡」

「んひいッ
最悪、最悪最悪！
いやああ！
気持ち悪い！」

びっ

ズ
ズ
ズ



「どれだけ威張っても、体の感覚はお前そのままだ
俺のちんこが奥まで擦れる感触、たつぷり味わえ」

「くっ…はあ、はあっ…っっ♡
お前マジで死ねよ…ッ！」

（悔しい…っ、悔しいのに
身体が止まんない…っ♡）

♡
♡
♡

♡
♡
♡

♡
♡
♡

♡
♡
♡

「どうだ？気持ちよくなってきたら？」

イきたいか？
でもダメだw

ギリギリのところでピストンしてやるよ」

「んあぁっ♡…っ！
気持ちよくなんかない！」

♡
♡

♡
♡

（なにこれっ!!
気持ちいいのに、あとちよっとのでんぐりで
焦らされていけないっ…♡）

♡
♡

♡
♡

「泣いて頼んだら、奥まで突き上げて
イかせてやつてもいいぞ?」

「はあっ、はあっ♡
言わない! 絶対にアニタなんか頼まない…ツ♡」

はあ♡♡

はあ♡♡

「くそ!
こんなやつに頼んだら負けだ…っ!
でもっ、子宮が焦れておかしくなりそう…ツ♡」

しゅぽ♡

しゅぽ♡

「ほら………ここでストップだ」

ピタッ

「……え?! なんで……っ?!
嘘でしょ、ムンムンで止まるの?!」

はぁっ♡

はぁっ♡



「体の自由は返してやったぞ
イきたかったら、自分の腰で好きに動いたらどうだ？」

「……っ！はあっ、はあっ

ふざけんな！

誰がアミタのチンコで腰なんて振るかバカっ！」

くっ…

（動きたい…っ！

今すぐ腰振ってイきたいっ…！

でも、自分から動いたら

こいつの思い通りになっちゃう…ッ♡）

「強がっても無駄だ
ここを摘まれると
子宮に響くだろ？」

「ひゃああっ!!
な、なに乳首触って…んああっ♡♡♡」

♡♡♡♡♡

ヒュン

おっ♡

おっ♡

おっ♡

おっ♡

「んくうっ♡
子宮が、子宮がキュッキュウじちゃって…ッ♡
身体が、我慢できないっ♡♡♡」

♡♡♡♡♡



（ああもう無理！
体が我慢できないっ！）

コリコリ♡

「おいおい口では拒みながら
自分から腰を振り始めたぞ
俺とエッチしたくてたまらなかつたんだろ？」

お♡

お♡

ヒュー

カリカリ♡

「ち、違うから！
これは私のオナニーのため
に振ってるんじゃないからっ♡
たまたまアニタのチンコがそこ
にあるだけの私のオナニーなん
だからああ♡♡」

ハチゅ♡

ハチゅ♡

ハチゅ♡

ハチゅ♡

「はははは、
言い訳しながら凄まじい勢いで腰を振ってるぞ
俺のちんこでオナニーするのは気持ちいいか？」

「おほおおっ♡♡おほっ♡♡
乳首グリグリすり潰されてえっ♡
んあっ、オナニー最高おっ♡♡♡
止まらない、止まらないよおっ♡♡♡」

コリコリ♡

お♡

お♡

カリカリ♡
カリカリ♡

「やばい、自分の意思で動かしたら
一気に気持ちよさが押し寄せてくるうっ♡♡」

ハチゅ♡

ハチゅ♡

ハチゅ♡

ハチゅ♡

「自分の腰使いで自滅する気分はどうだ？
もう限界だろ、盛大にイけ」

「あああっ♡♡
ダメっ、自分の腰つきでイっちゃう♡♡
おまんこビクビクして止まんない♡♡♡♡」

コリコリ♡

お♡♡

お♡♡

カリカリ♡

カリカリ♡

「子宮の奥叩かれて頭おかしくなるうっ♡♡
イぐ、イぐッ！ 私のオナニーでイっちゃううっ♡♡♡♡」

ハチゅ♡

ハチゅ♡

ハチゅ♡

ハチゅ♡



「自分で腰を振っていくオナニーは満足できたか？」

「はぁーっ♡ はぁーっ♡……あ♡」

♡♡♡♡♡

はぁ♡♡

はぁ♡♡

♡♡♡♡♡

「おまんこ、熱いよぉ……っ♡
ぜんぶ出し切っちゃった……っ♡」

びゅ♡♡

びゅ♡♡

とろー♡



「体は完全に俺のちんこに屈したな
これからもたっぷり可愛がつてやるからな」

「……っ!
調子に乗んな!
絶対にお前を許さないからな!」

